

『愛市運動講演集』

伊藤博 [編]

東京愛市聯盟 [刊]

1937年2月 四六判/40頁 図書番号 OAZ-0627

東京市会は明治期以来腐敗が絶えず、昭和に入っても板船権事件（魚市場の築地移転に伴う補償金支給に関する汚職）など多数の疑獄が発生し、その都度市政浄化が課題とされてきた。1936（昭和11）年11月、選挙粛正中央連盟は翌年3月に控えた東京市会議員選挙に向け、不正防止と市政刷新を目的とした愛市運動を起こすことを決議した。運動の立ち上げには6人の元東京市長（尾崎行雄、阪谷芳郎、永田秀次郎、伊澤多喜男、市來乙彦、堀切善次郎）が協力し、「東京愛市連盟」が発足した。

1937（昭和12）年1月、運動への参加を市民大衆に呼びかけるべく、明治神宮外苑の日本青年館において「愛市連盟結成市民大会」が開催された。本書は、この大会における元東京市長6名の講演と挨拶を収録したものである。

元東京市長のうち尾崎、永田、堀切が大会に参列し講演を行った。最初に愛市連盟会長の堀切が登壇し、「凡ゆる點に於て全國の中心」である東京市は、「凡ゆる點に付て全國の模範とならなければならぬ」と説いた。そして「東京の市會をして全國の模範たらしめ東京の市政をして全國の模範たらしめ」るために、「今度の市會議員の選挙に臨み、立派な人の市會に出られますやうに、立派な人の市會に出られ易いやうに、立派な人を選ぶやうに、お互いに我々の力を盡したいと思ふ」と選挙に向けての抱負を語った。

市長として震災復興に携わった永田は、復興によって東京市の外観が綺麗に整備されたことを取り上げ「東京の外観のことになりますと、私は（中略）非常に鼻高々と反り身になつて話ができる」と述べた。しかし「東京市役所がどうだとか、東京市會がどうだといふ話」になると、市長を務めた自分は「身體を小さくしなくちやならぬ」ので、今度の選挙では立派な議員を選出して自分が肩身の狭い思いをしなくても済むようにしてもらいたい、とユーモアを交えて語った。

尾崎は「自治の精神が徹底すれば市は良くなる」のであり、そのためには「選挙の仕方を根本的に取變へなければならぬ」と主張した。現在の選挙は「議員になりたい人が運動してなる」のであるが、これは「自治の精神から言ふととんでもないこと」である。ゆえに、議員になりたい者が立候補して選挙運動をするのではなく、市民自らが議員になってほしい人物を候補者として擁立し、その人物のために選挙運動を行うようにしなければならないとした。また、東京市を都制にして都長を官選にしようという意見に対しては、「自治體の首腦が民選でなければもう自治體ではない」「官選にすれば自治體はそこで幾何か壊れてしまふ」と厳しく批判した。

阪谷、伊澤、市來の3名は大会を欠席したが、挨拶文が代読された。

大会後、連盟は選挙に向けて市民の政治意識を高めるべく、様々な活動を行った。活動内容は街頭デモやビラ配り、ラジオ放送やポスター展覧会など多岐にわたった。こうした連盟の働きもあって、1937（昭和12）年3月に行われた東京市会議員選挙は、棄権率の低下や新人議員の増加、革新勢力の躍進といった結果をもたらした。

（井上学・市政専門図書館司書）